

疑問文・疑問表現研究史

林 淳 子

1 本稿の目的・構成

本稿は、これまで日本語学において疑問文や疑問表現に関する研究がどのように行われ、何が明らかにされてきたかについて整理して示すことを目的とする。

第2節では、疑問文とは何かという原理的な問いが日本語学においてはどのような動機で生まれ、どのような説明がなされてきたかを見る（原理的研究）。第3節では、疑問文を構成する文法形式に着目し、その形式が疑問文の中でどのようにはたらいっているかについて考察する研究をまとめる（構成要素の研究）。そして第4節では、ある時代、ある作品などに範囲を定め、その中に出現する疑問文型を網羅的に洗い出し、複数の文型が何を基準に使い分けられているかを整理するタイプの研究をまとめる（文型の研究）。もちろん、ひとつひとつの研究は構成要素や文型の分析を通して疑問文とは何かを考察するものであり、どれかひとつのタイプだけに属するものではないが、便宜上このように分類した。

なお、後述のように、日本語文法研究において疑問文は文の種類としてよりも、表現の種類として注目され、研究が行われてきたという経緯がある。そのような研究では考察対象を「疑問表現」として扱うことから、以下では疑問文をめぐる先行研究の全体を疑問文・疑問表現研究と称することにする。

2 原理的研究

本節では、国語学・日本語学において疑問文がどのように捉えられてきたかを概観する。特に、疑問文研究の暗黙の前提と化している「疑い+ α =問い」という図式はどのようにして生まれ、展開してきたのか、そしてどのような点にこの図式の限界があるのかを中心に見ていく。

はじめに、以下で扱う研究がどの時期にどのような立場で行われ、次世代の研究にどのような影響を与えたかについて大まかに図で示す。なお、阪倉 1993 など古代語の疑問文の分析を通して疑問文とは何かを論じる原理的研究もあるが、疑問文に対する捉え方の変遷が見えやすくなるよう、本節では現代語の（あるいは、時代を特定せずに）疑問

文を対象とする研究に限定して見ていく。

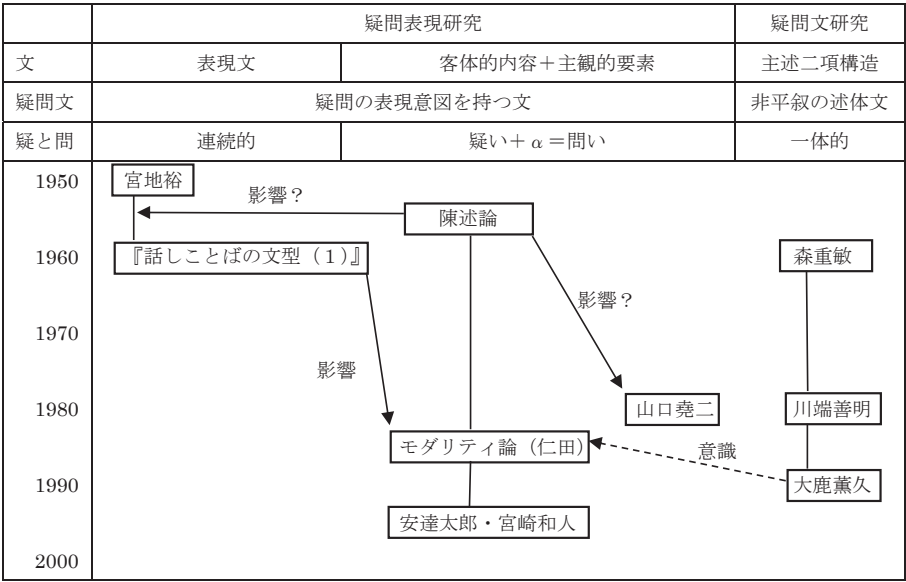


図1 原理的研究

2.1 表現意図への注目

疑問文の原理的研究はまず、話し手の表現意図の観点から疑問表現と他の表現との違いを指摘する宮地裕の一連の研究によって始まった（宮地 1951・宮地 1954・宮地 1958¹⁾）。言語主体や場面への依存度の高い「表現文」と、誰がどこで言っても成り立ち、独立性の高い「文」とを区別する宮地は、「表現文」として見たときに平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の4種がどのように異なるかを明らかにするにあたり、特に疑問表現に着目した。

宮地はまず、疑問表現内部に単純な疑問表現から複雑な疑問表現への連続性が見られるとし、以下の3段階を設定した。

疑問兆候 「はてな?」「え?」

表象的疑問 「だれ?」「次郎かい?」

判断的疑問 「そこにいるのはだれ?」「そこにいるのは次郎かい?」

加えて、これら典型的な疑問文の周辺に、以下のような周縁的な疑問表現が存在する

¹⁾ これらは、宮地 1979 の第一章「文の意味」にまとめられている。

ことも指摘した。

反語表現	「こんなゆうやけで、あした、雨が降るかい」
勧誘	「花火を見にいこうじゃありませんか」
同意要求	「わたしの言うことにまちがいはないでしょう」
応答	「あ、そうですか」
断定しながらの問いかけ	「おまえはわたしを尊敬してなんかいないんだ、ねえ？」
疑いつつの推量	「おまえ、さむいんだね？」

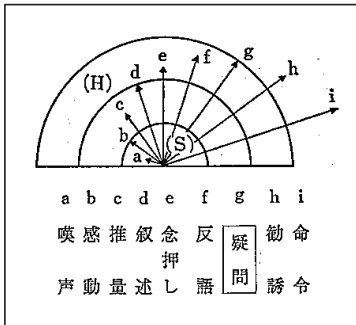


図 2 (宮地 1979 p.87)

そして、このように内部にも周辺にも広がりを持つ疑問表現の意味は、疑問表現の話手の表現意図が、言語表現に表されうる話手の表現意図の中でどのように位置づけられるかによって定めるしかないと宮地は考える。たとえば、図 2 (宮地 1979 p.87) のように、相手に対する言語影響力の強さを矢印の長さで示せば (図中、(S)は話し手の言語活動域、(H)は相手の言語活動域を指す)、答えという形での相手の言語活動を予期している疑問表現は、これを予期しない反語表現と、言語活動に加えて具体的行動まで要求する勧誘表現との間に位置づけられることになる。

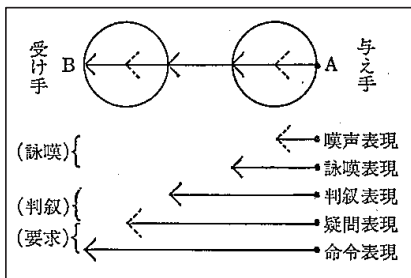


図 3 (宮地 1979 p.98)

他にも、図 3 (宮地 1979 p.98) では、疑問表現から伸びる矢印を判叙と要求の表現意図の境目に描き、疑問表現を判叙表現と要求表現の境目に位置づける。これは、話し手の表現意図が連続体をなすものであり、疑問表現が (分らないものとして提示するとはいえ、) 事態内容を言語化する点で判叙表現的であると同時に、相手に答えを求める点で判叙表現よりも相手に届いていることを主張するものである。

こうして、宮地が疑問表現は一方では判断性を持ち、他方でははたらきかけ性を持つことを指摘するというやり方で疑問文と他の文の種類との関係を考察したところから、日本語の疑問表現研究は始まったと言える。宮地は文を表現意図だけでなく、表現意図と外形の対応関係として捉えるべきであると述べているが、これが果たされるのは国立

国語研究所 1960 のうち宮地が執筆を担当した「表現意図」の節においてである。そこでは、話し手の表現意図を細かく分類した上で（図 4）、それぞれに対応する具体的な文の形（文末部分）を挙げている。

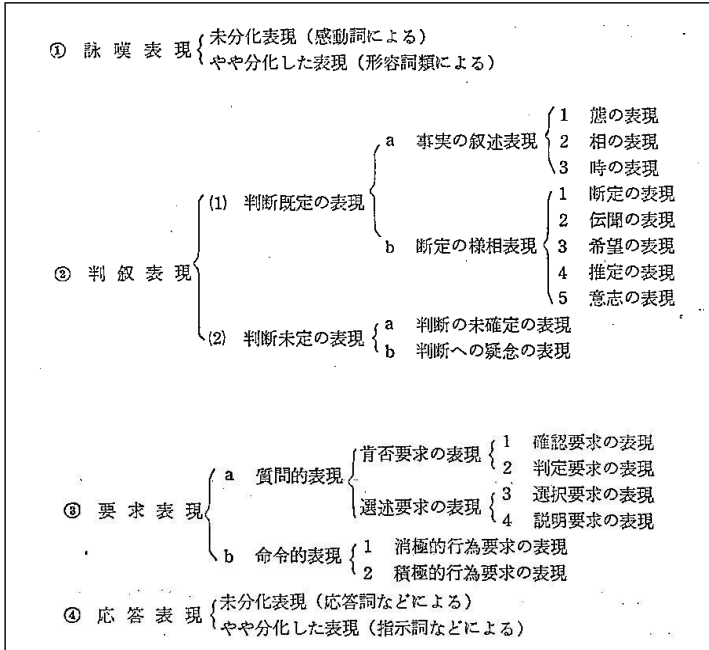


図 4 表現意図の分類（国立国語研究所 1963 pp.2-3）

図 4 に掲げるように、この分類ではまず、相手に対する要求の有無に応じて詠嘆表現・判叙表現と質問表現・命令表現とを分ける。その結果、質問でない疑問文（「なんだい相撲かと思ったら相場か」「ちょっと違うかな」；国立国語研究所 1960 pp.105-106）は判叙表現のうちの判断未定の表現に分類され、質問表現と異なる位置に配される。

1950 年代の研究からの転換として、宮地 1951・1954 で指摘されていた表現同士の連続性は、国立国語研究所 1960 では表現間の包含関係として述べられる。詠嘆表現は判叙表現の内に含まれ、判叙表現は要求表現の内に含まれるという表現同士の包含関係を想定するのである。内側にある表現は「外的変容と相手への要求を表す要素の附加とによって」内的に含まれていくものであるという²。

国立国語研究所 1960 における表現意図の分類がその後の疑問表現研究に与えた影響は

² この転換は、後述するように陳述論の影響を受けているものと見られる。

大きく、特に疑問表現は質問表現と非質問表現に分かれ、後者は前者よりも平叙文寄りの位置にあるという見方は、その後の議論の基本的な前提となった。

2.2 陳述論と疑問表現

以上の宮地の一連の研究と同じ時期、1950年代から60年代にかけて日本語文法論の中心的存在であった陳述論の議論は当然、疑問表現研究にも影響を与えた。具体的な影響を見る前にまず、陳述論の流れを確認しておく³。

陳述論の始まりは、時枝 1941 が文は詞で表される客体的内容を文末辞の主体的作用が包むことによって成立するという見方を提示したことにあると言われる。この考え方に基づいて陳述論の議論を活性化させたのが金田一春彦 1953a、1953b である。この中で金田一は文末辞である助動詞の中にも主観的なものと客観的なものがあると指摘したのだが、包む側である文末辞に異なる 2 種を設定したことは、文の成立を重層的な包含関係イメージで捉えるきっかけとなった。これを機に包含関係の包む側にあたる文末辞のはたらきを精密に把握することによって包含関係の内実、ひいては日本語の文成立のしくみを明らかにしようとする取り組みが活発化した。その代表的なものが、金田一と同時期に発表された渡辺 1953 である。渡辺は、文末辞のはたらきには、事柄の内容を描きあげる叙述のいとなみと文を完結させる陳述のいとなみがあると論じた。

前述の宮地 1951・1954 における疑問表現と他の表現の連続性指摘から、国立国語研究所 1960 での表現同士の包含関係解釈への転換は、このような陳述論隆盛の流れの中でこそ理解すべきものと思われる。

陳述論の中で疑問文は積極的な議論の対象となったわけではないが、芳賀 1954 には疑問文を例に挙げて説明している箇所がある。渡辺 1953 の修正を目的とする芳賀 1954 は、渡辺のいう陳述のいとなみはさらに述定と伝達とに分けられると主張する。このうち、述定は客体的に表現された事柄内容についての話し手の態度を言い定めるものであり、具体的に言えば断定・推量・疑い・決意・感動・詠嘆などであるという。一方、伝達は事柄の内容や話し手の態度を聞き手（時には話し手自身）に向かってもちかけ、伝達するものであり、具体的には告知・反応を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答などであるという。そして、「芝居ではじまるかね？」という問いかけの表現を例に挙げ、この文のうち「か」は客体的事態に対する疑いという話し手の主観を表して述定のはたらきをしており、「ね」は相手の反応を求める態度を表して伝達のはたらきをしていると説明している。

この記述により、芳賀 1954 は結果的に、陳述論の枠組における疑問表現の扱いとして

³ 以下の陳述論に対する見方は尾上 1990 による。

次の2点を示したことになる。すなわち、疑いと問いかけは文成立上の別の段階に属すること、そして疑いと反応求めはそれぞれ別の形式によって表されることである。これにより、「疑い+反応求め=問いかけ」という図式が成立し、宮地が指摘した疑問表現の判断性とはたらきかけ性とが重層的に重なって問いかけになると理解されるようになった。

2.3 陳述論の影響（1）山口堯二の疑問表現研究

上述のように陳述論自体が疑問表現を積極的に扱うことはなかったが、疑問表現を対象とする研究にも、その影響を受けているように見えるものがある。たとえば、山口堯二が1980年代に原論文を発表し、『日本語疑問表現通史』（1990）にまとめた一連の疑問表現研究もそのひとつである。山口は、形式や伴うニュアンスの点で多様に広がる疑問表現を通史的に眺め、それらがすべて話し手の自問自答の所産である「解答案」の提示として統一的に説明できることを主張した。山口自身は陳述論の論者ではないものの、文を客体的な内容とそれ以外に分け、前者を「解答案」とするやり方は陳述論的な文の見方が全盛の時代背景と無関係ではないであろう。

「解答案の提示」という統一的な説明に付随して、山口は疑問表現の体系を次のように捉える。1点目は、質問表現（「問い」の表現）と非質問表現（「疑い」の表現）は原理的に区別できないという考え方である。図5に示すように、両者の区別は解答要求志向の有無によるというのが山口の考え方であるが、解答要求志向は疑問表現が内面に必ず有する疑念解消志向のおのずから発展したものであるため、話し手の意識においてすら解答要求志向の有無に明確な境目はないという。

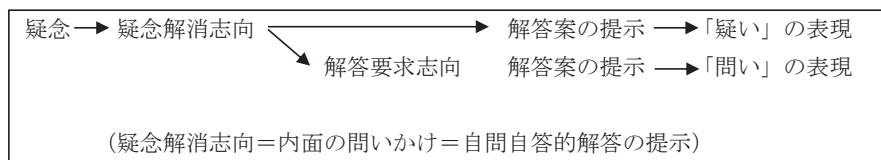


図5 「疑い」と「問い」(山口1990 p.11)

2点目は、非質問表現は対自的疑問表現であるという考え方である。図5に示す通り、非質問表現は疑念解消志向はあるのに解答要求志向のない疑問表現である。この場合、話し手が自力で疑念解消をはかろうとするのが自然であるため、非質問表現はみな対自的疑問表現なのだという。そして、その具体的な形式として、現代語では「だろうか」「かな」「かしら」、古代語では「む」などを伴う自問の形式を挙げている。

山口の研究は、解答案の提示というひとつの見方で上代語から現代語に至るまで幅広い時代の実例を説明した点で魅力的である。一方で、その魅力ゆえに、非質問表現はみな対自的疑問表現であるという日本語疑問文の性格規定に深くかかわる考え方が検証されないままにその後の疑問表現の暗黙の前提となっている面も否定できない。

2.4 陳述論の影響（２）モダリティ論における疑問表現の扱い

山口堯二の疑問表現研究が陳述論から受けた影響は時代背景による間接的なものであったのに対し、直接的に陳述論の影響を受けているのがモダリティ論における疑問表現の扱いである⁴。陳述論が区別した文の客体的内容と主体的作用のうち、疑問文の客体的内容の特殊性に着目したのが山口の疑問表現研究であるのに対して、疑問文における主体的作用のあり方に着目したのがモダリティ論における疑問表現の議論である。

モダリティ論の基本的な枠組を示す仁田 1991 はまず、文の類型を定める発話・伝達のモダリティは次の図 6 のように①働きかけ②表出⁵③述べ立て④問いかけの 4 つに分類されると述べる。

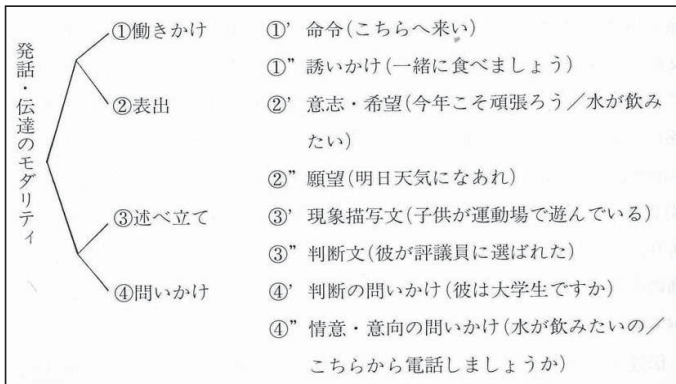


図 6 発話・伝達のモダリティ (仁田 1991 p.22)

この分類において、疑問表現は質問表現と非質問表現とで置かれる位置が異なる。質問表現は当然、④問いかけに分類されることになるが、非質問表現は③述べ立ての下位分類である③"判断文のうちの疑いの文として位置づけられる。この位置づけは基本的に国

⁴ 尾上 2012 によれば、モダリティ論は陳述論の延長線上にあるという。

⁵ 仁田 2016 では「意志の表出」に名称が変更されている。

立国語研究所 1960 を踏襲したものである⁶。

上記の文類型のもと、疑問表現は次のように規定される。まず、もっとも典型的な疑問表現である〈判断の問いかけ〉は〈言表事態のモダリティ〉のレベルにおける文法的意味である〈疑い〉と、〈発話・伝達のモダリティ〉にかかわる文法的意味である〈問いかけ〉とによって成り立つという。これはまさしく「疑い+ α =問い」の図式である。一方で、〈判断の問いかけ〉以外の疑問表現にはこの図式に当てはまらないものも存在することを認め、たとえば、〈疑いの文〉（「あいつ、ユーレーかな、やっぱり。」(p.145)）は〈判断の問いかけ〉から問いかけ性が欠落・希薄化したもの、〈疑似疑問〉（「車をお持ちでしたね？」(p.152)、「君はあの殺された子を知っているんだろ？」(p.153)）は反対に〈判断の問いかけ〉から〈疑い〉を消滅・減少・希薄化させることによって〈問いかけ〉の質を変質させたものであるとする。また、〈意向の問いかけ〉（「あの、ぼくが見てみましょうか。」(p.157)）も内側に〈疑い〉を持たないという。

〈疑い〉や〈問いかけ〉は減少したり希薄化したりするものなのか、また〈疑い〉を持たない〈問いかけ〉を単なる反応求めでなく〈問いかけ〉と呼ぶのは妥当なのかなど、上記の議論には検討の余地がある。さらに、仁田は〈疑似疑問〉は図 6 の中で③述べ立てと④問いかけの中間に位置すると述べるが、そもそも図 6 に示す分類に中間という位置を認めてよいのかも分からない。このように仁田 1991 は、多様な疑問表現間の差異に目を向けることにより、「疑い+ α =問い」の図式ですべてのタイプの疑問表現を説明することの難しさを明らかにした。

これに対して、〈判断の問いかけ〉以外の疑問表現についてモダリティ論の枠組で説明を試みたのが、安達太郎および宮崎和人の疑問文・疑問表現研究である。まず、安達 1999 は、疑問文なのに情報を提供する文として否定疑問文（「雨が降っていないか。」）や「ノデハナイカ」文（「雨が降っているんじゃないか。」）、情報でなく確認を要求する文として「ダロウ」や「デハナイカ」（「雨が降っているんじゃないか。」）に着目する。安達によれば、このうち、否定疑問文と「ノデハナイカ」文は肯定命題への傾きを持つために情報提供文たりうるといふ。ここでいう「傾き」とは、疑問文における話し手の判断の実現を指す。一方、「ダロウ」「デハナイカ」は、話し手にとって成立した判断を聞き手に投げかけることによって聞き手の知識を活性化させるという共通点を持つが、「ダロウ」が問いかけ性を持つものに対して「デハナイカ」は問いかけ性を持たず、疑問文としての性格を失っている点で異なるとする。

宮崎 2005 は、疑いの文として「ダロウカ」（「彼は来ているだろうか？」）・「ノデハナイカ」（「彼は来ているんじゃないか？」）に、確認要求の文として「ダロウ」（「彼は来ているでしょう？」）・「ノデハナイカ」・「ネ」（「彼は来ていますね？」）に着目する。この

⁶ 仁田のこの分類が国立国語研究所 1960 の影響を受けていることは仁田 2016 から窺える。

うち、「ダロウカ」「ノデハナイカ」は本質的に話し手の〈疑い〉を表すという。宮崎はこの〈疑い〉を「カモシレナイ」が表す可能性と「ダロウ」が表す推量との間に置く。そして、「ノデハナイカ」が形成途上の推量判断を聞き手に向けて差し出すことによって確認要求の用法を得るのに対し、「ダロウ」は話し手の認識の不確かさを表現することにより、「ネ」は話し手のその場の認識を相手に向けることにより、それぞれ確認要求の用法を得ると考える。

このように命題内容に対する話し手の判断のあり方（判断のモダリティ）が平叙文とも典型的な疑問表現とも異なることをもって非典型的な疑問表現の説明とする安達 1999 や、命題内容が話し手のどのような認識や判断に基づくものであるかが述語形式に表現された結果、疑いや確認要求の表現になると論じる宮崎 2005 は、疑問表現の客体的内容の形成過程に表現の特殊性の源を求める点で山口 1990 の「解答案」の考え方を応用して仁田 1991 の提示した問題を解決しようとしたものであると言える。ただし、山口 1990 が疑問表現全体を「解答案」の提示として説明するのと異なり、これらは非質問表現のみを対象とするものであるため、結果的に質問表現（典型的な疑問表現）と非質問表現（非典型的な疑問表現）との乖離がさらに強調されたようにも思われる。

2.5 述体としての疑問文研究

国語学・日本語学における疑問文研究の大部分を占めるのは、ここまで見てきたような表現の種類としての疑問表現研究であるが、表現の種類としてではなく文の種類として疑問文に着目した研究も少数ながら存在する。この場合、疑問文が主語述語のある文（述体文）であることに目が向けられ、文としての疑問文が同じく述体文である平叙文に比してどのように規定できるかということがまず問題となる。

このような関心から、森重敏は『日本文法通論』（1959）において「疑問とは主語に述語をつけかねることである」（p.226）と述べる。また、川端善明 1979 は「表にあって肯定・否定と並ぶ推定は、その対象構造において肯定及び否定を可変的に結ぶ積極的な中間者であった。一方、裏としての疑問とは、肯定或いは否定としての断定の、その中止において位置づけられる消極的な中間者である」と述べ、右のような図を描く。

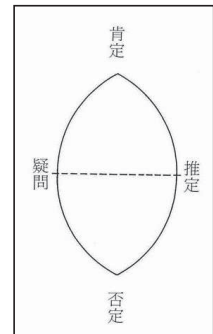


図 7（川端 1997 p.294）

これらは表現論的な観点から離れ、文としての疑問文が平叙文や推量文などと比べてどのように規定され得るかに言及した点で貴重であるが、これ以上の詳しい言及はな

い。これに対して、森重・川端の疑問文規定に基づき、具体的な疑問文の説明を試みたのが大鹿 1990 である。大鹿はまず仁田 1989⁷のいう「相手への問いかけの意図」の有無は表現論の問題であって文法論の問題ではないことを、次のように仁田 1989 の挙例を変形することによって示す。

・ あら、私、瞬間湯沸器の点火栓を消してきたかしら？ (仁田 1989(66))

ねえ、私、瞬間湯沸器の点火栓を消してきたかしら？ (大鹿 1990)

・ あいつ、ユーレーかな、やっぱり。(仁田 1989(67))

おい、あいつユーレーかな、やっぱり。(大鹿 1990)

・ もしかしたら、おれはもう手遅れじゃないだろうか。(仁田 1989(68))

なあ、おまえ、もしかしたらおれはもう手遅れじゃないだろうか。(大鹿 1990)

そして、文法論の問題としての「問い」は、相手への問いかけの意図の有無にかかわらず、疑問文である以上必ず存在すると主張する。Yes/No 疑問文の場合には肯定にしろ否定にしろ留保されている承認を行うことが問いであり、Wh 疑問文の場合には不定部分の具体化が問いであると、文法論としての「問い」を規定するのである。

このように、表現論における「問い」と文法論における「問い」を区別し、文法論の問題として「疑い」と「問い」の関係を考える可能性が示唆されたことは大きな意味を持つと思われるが、これに続く議論はなされないまま現在に至っている。

2.6 近年の動向

以上のような流れを持つ疑問文・疑問表現の原理的研究だが、近年、上記の流れとは異なる角度からの研究も行われている。ここでは、代表的なものとして次の 2 つを挙げる。

ひとつは、三宅 2011 の第 4 部「意味論と語用論のインターフェイス」に収録されている一連の研究（原論文の発表時期は 1995～2007 年）である。三宅は安達・宮崎がモダリティ論の立場で説明してきた現象について、異なる枠組での説明の可能性を示唆する。具体的に言えば、認識的モダリティの形式である「ダロウ」が確認要求に用いられるメカニズム、そして「だろうか」の形で通常の質問とは異なるニュアンスの質問表現になるメカニズムを、プロトタイプやスキーマといった認知言語学の装置を用いて説明するのである。それによれば、「ダロウ」は「想像の中での認識」というスキーマに基づき、「推量」用法をプロトタイプとして、「命題確認の要求」用法、「知識確認の要求」用法へと用法を拡張させる。他の確認要求の形式と異なり、「同意要求」用法を持たないのはこのスキーマに適さないためである。さらに、「だろうか」は「不定推量」用法をプロト

⁷ 仁田 1989 は前述の仁田 1991 第 1 章の原論文である。

タイプとして、「弱い質問」用法、「丁寧さの加わった質問」用法へと拡張するが、そのスキーマは平叙文における「ダロウ」と同じく「想像の中の認識」であるという。

また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」（2013～2016）もこれまでと異なる角度から進められた疑問文・疑問表現研究であると言えよう。歴史的研究や方言研究、対照言語学などさまざまな実証的研究の立場から疑問文にまつわる現象を持ちより、突き合わせることによって日本語疑問文研究の課題を見出そうとするこのプロジェクトにより、係り結びや間接疑問文、名詞化要素の疑問文におけるはたらきなど、日本語の疑問文研究で扱われてきた問題が通言語的な視点から捉え直された⁸。

2.7 今後の課題

原理的研究の今後の課題は、以下の3点に集約される。

（1）「問い」概念の精密化

見てきたように、「問い」あるいは「問いかけ」という言葉でイメージする内容は論者によって異なる。表現論の問題として「問い」を扱うのか、文法論の問題として「問い」を扱うのかによっても、当然「問い」の指すところは異なる。そもそも、疑問文の「問い」にどのようなものがあるか網羅的に挙げた研究はなく、「問い」の範囲や内実もいまだ明らかでない。これらの問題を克服するためには、まず「問い」に関する精密な事実把握を行った上で、日本語の実態に即した「問い」概念を設定する必要がある。

（2）非質問表現の扱い

日本語の疑問文には非質問表現が幅広く存在する（林 2016）。見てきた通り、この存在の認め方・位置づけ方はどのような立場に立つにしても難しい問題である。従来の研究が暗黙の前提としてきた「疑い+α=問い」という図式の根底には、非質問表現は質問表現に比して何か欠けた文であるという見方があるように思われる。しかしながら、疑問文としての共通性を見失わないような非質問表現と質問表現の関係規定を目指すならば、このような見方の妥当性を改めて検討する必要がある。

（3）文の4分類への意識

⁸ プロジェクトによって作成された中世日本語疑問文・用例データベースおよび日本語疑問文・文献データベースはプロジェクトが終了した現在も使用可能である。（<http://j-int.info/archives>）

疑問文という文の種類、疑問という表現意図への関心の発端は、日本語において文の4分類はどのように認められるかという問題にあった。ところが、日本語の疑問表現の多様性が明らかになるにつれ、多様な疑問表現の位置づけや統一的説明に原理的研究の関心が移り、文の4分類への意識は次第に失われていったように見える。とはいえ、疑問文・疑問表現というものについて原理的研究を行うのであれば、それはそもそも疑問文という文の種類を立てる必要が日本語の実態に即してどの程度認められるのかという問いに答えられるものでなければならない。この点を意識して、これまでの研究成果を見直す必要がある。

3 構成要素研究

疑問文を構成する文法形式がそれぞれ疑問文においてどのようなはたらきをしているかという問題は、古代語疑問文についても現代語疑問文についても盛んに見られる問いの立て方であり、疑問文・疑問表現研究史の大きな一角を占める。以下では、古代語の連体形終止、ム系述語、係助詞「ヤ」「カ」および現代語の「ノ」「カ」を対象に行われてきた研究を取り上げ、現在の到達点を確認する。

3.1 連体形終止

3.1.1 疑問詞疑問文と連体形終止

「何」「誰」「いつ」「どこ」などの疑問詞（不定語）と連体形終止の結びつきの指摘は、本居宣長が『てにをは紐鏡』および『詞の玉緒』において、連体形で結ぶ文にはそれより上に「ぞ」「の」「や」「何」が置かれていると指摘することに始まる。これを受けて山田 1908 は、係助詞がないにもかかわらず連体形で結ぶ「「の」「が」「何」のかゝり」は「一種特別の約束を句の結成に対して有せるもの」であると述べ、「何」があればその力によって結びが連体形になると、宣長の指摘する事実を逆の方向から捉えた。また、山田は「何」が疑問を表わす場合には連体形で結ぶが、不定不明を指す場合には終止形で結ぶとし、後者は宣長が「変格」として挙げるものであると述べている。

この「疑問詞による係り結び」が認められるか否かについて検証した研究に、和歌を対象とする船城 1973 や、散文を対象とする高瀬 1989 がある。このうち高瀬 1989 は疑問詞を代名詞系のもの（「たれ」「いづれ」「いつ」「いづく」など）と副詞系のもの（「など」「いかが」「いかで」「いかに」など）に分け、疑問詞の種類によって結びの活用形の

傾向が異なると指摘する。すなわち、前者の結びはすべてム系述語のように終止連体同形の述語である。後者のうち「いかが」「なぞ」「なに」「など」「いかに」の5語は確実に連体形で結ぶ一方で、「いかに」「いくばく」の2語は終止形終止になるという。

3.1.2 終止形終止の疑問詞疑問文

上記の「疑問詞による係り結び」を認めようとするとき問題になるのが、疑問詞があるにもかかわらず終止形で終止する疑問文の存在である。そのような疑問文にはまず、上代語に見られる次のようなものがある。

- ・ぬば玉の夜渡る月を伊久欲布とよみつ妹は我待つらむそ（万葉集 4072）
- ・たらしひめ足姫神の尊の魚釣らすとみ立たしせりし石を多礼美吉（万葉集 869）
- ・たれききつ誰聞都こゆ鳴き渡る雁が音の妻呼ぶ声のともしくもあるを（万葉集 1562）

これについて阪倉 1956 は疑問詞自体の「問い」の機能は弱いため、推量表現と呼応することによって疑問詞としての意味合いを帯びるわけではない万葉集 869 番のような例は「誰かが見た」と不定称に解すべきだと説く。ところが、阪倉 1993 では一転して、同じ 869 番歌に対して、終止形によって普通の判断叙述がなされているものの、不定詞によって全体に「疑い」の気持ちがこめられているとして、疑問文と解釈する。さらに、疑いの気持ちを表明したものが緊密な精神的協同の場にある者同士では問いに解されることもあると、問いへ至る可能性まで言及している。

また、疑問詞疑問文では判断が承認されていると考える大鹿 1990 は、助詞「カ」によって不定部分と前提部分を分けるわけでもなく、推量の助動詞によって蓋然的すなわち確定的なものとして事態を表すわけでもない「誰聞きつ」タイプは、「聞いたかどうか」自体が問題になる解釈すなわち Yes/No 疑問文に近い解釈も成り立つと述べている。

終止形で終止する疑問詞疑問文には、中古語に見られる次のようなものもある。

- ・君こふる涙にぬるるわが袖と秋の紅葉といづれまされり（後撰集・7）
- ・涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露や何なり（後撰集・11）
- ・さだめなくきえかへりつる露よりも空だのめする君はなになり（蜻蛉日記・上）
- ・わが髪のと磯辺の白波といづれまされり沖つ島守（土佐日記）

このタイプについて此島 1972 は、土佐日記の例のように問う形式にもなる以上、疑問の意以外に解しようがなく、「柔なる言様」であるために終止形でも許されるのだと述べている。一方、高橋 1980 は終止形終止の疑問文を一括して説明するのは難しいとして「—（は・も・や）何なり」だけを取り上げるが、この文型の疑問文が相手から答えを得ようと期待するものであることは少なく、話し手の不納得や抗議の気持ちなどを表すものであるという。そして、そのような疑問文にあって、「や」は「春霞立てるやいづこ

みよしのゝ吉野の山に雪は降りつつ」(古今・春上)と同様に間投助詞的なものであり、それゆえに「なり」も連体形になる必要がなかったと論じている。

3.1.3 連体形終止の疑問用法

疑問詞疑問文に限らず、係助詞「ヤ」「カ」の係り結びによる疑問文も含め、古代語疑問文の多くは連体形で終止する。そのため、連体形終止の機能や用法を論じる研究の中で疑問用法の説明がなされることも多い。

まず、連体形終止の様々な用法の中に疑問用法を位置づけることを試みるタイプの研究に、尾上 1982 や阪倉 1993、山内 2003 がある。尾上 1982 は連体形終止の文を、Ⅰ擬喚述法、Ⅱ上代に見られる句的体言としての連体形終止文、Ⅲ平安時代以降見られる解說的表現の3種に大きく分類する。このうち、疑問文にかかわるものとしてⅠ擬喚述法には感動の擬喚述法と並んで疑問の擬喚述法がある。また、Ⅱは句的体言によるアモーダルな事態描写が文型や文脈的条件のもとで安定的に存在するものを指すが、そのひとつに疑問文(係助詞を含む文のひとつのタイプ)に後置するケースがあるという⁹。

尾上 1982 が疑問文に関係する連体形終止の用法として挙げた2種のうち、擬喚述法の方に注目するのが、阪倉 1993 である。阪倉 1993 は喚体句という文の用法のひとつに疑問用法を位置づける。「全体を一つの体言(相当のもの)にまとめて、感情をこめて、これを未結着のままに投げ出す言い方」である喚体句は、驚き、詠嘆し、感動する表現にとどまる場合と、理性的にその理由や肯否を求めての疑問表現に進む場合とがあるというのがその論理である。

一方、句的体言の方に注目するのが山内 2003 である。山内は上代の連体形終止文は基本的にすべて準体句に解せるとして、自立性に乏しい句的体言的な連体形終止文の用法を統一的に説明する。その中で疑問用法は、疑問の気持ちを端的に表出する文「いかにある布勢の浦そも」に後置され、前文で言い及ばなかった事実を述べる「ここだくに君が見せむと我を止むる」のような連体形終止文であるという。

喚体句にしろ句的体言にしろ、連体形終止文を体言相当の句と見る点は共通であるが、前者は体言相当句そのものが疑問文になると見るのに対し、後者は体言相当句が疑問文とセットで用いられるタイプの文であると言っているに過ぎない点で二つの考え方は微妙に異なる。これらの研究に対し、疑問詞疑問文が焦点構文であるために焦点取り立てとつり合いを保つ格好で文末の終止形式が変異すると考える小川 1987 のような研究もある。ただし、小川も連体形終止の疑問詞疑問文の情報構造は内容の確定している語

⁹ このような係助詞を含む文と連体形終止文の二文連置的な関係が「カ」による係り結びのはじまりであることは、野村 1995 によってよく知られているところである。

句（前提）と疑問詞部分（焦点）に分かれ、客体的に存在する前提部分は素材のみを表す形である体言の形すなわち連体形になるというように、結局のところ連体形終止文を体言相当句と見ている点では上と同じである¹⁰。

3.2 ム系述語

3.2.1 疑問文とム系述語の関係

高山 2002 によれば、中古語の疑問文にはベシ、ム、ラム、ケム、マシといったモダリティ形式が生起可能である（ラシ、ナリ、メリは生起不可能。ただし、反語表現にはナリ、メリが生起可能）という。特にム系述語の生起率の高さについては、多くの先行研究で言及されてきた。たとえば、上代語については野村 2001b が万葉集中の「カ」による係り結び文の約 3 分の 2 にはム系の助動詞が現れることを、中古語については高山 2016 が中古和文文学作品に見られる疑問文の約 7 割に「ム」などのモダリティ形式が用いられることを指摘している。

このような事実に対する解釈として、山口 1990 はム系述語を推量語と見て、推量語を伴う疑問文は推量的な解答すなわち想像としての解答を目指すものであると述べる。さらに、対自的疑問表現（非質問表現）はどの時代でも原則的に推量語を伴うという事実を指摘し、これは自力での疑念解消が自身の想像力を頼るものであるからと説明している。同じくム系述語を推量形式と見る近藤 2000 は中古語の疑問文に間接疑問文が存在しなかったことと関連づけた説明をしている。話し手の抱く疑わしい気持ちを主文で「私は〜かどうかわからない」と言語化することができない言語にあつては、推量形式を疑問文の中に繰り込む形しかなかったという論理である。

これに対し、「多くの言語ではふつう疑問と推量は同居しない」（野村 2014）ことから、ム系述語を推量形式と見ない説明もある。たとえば、ム系述語を設想（事柄を想定の・想像的に示す働き）の助動詞であると考えた野村 2001b は、係助詞「カ」が一文の陳述を支配するため、文末には「カ」の不確かさに呼応したム系の助動詞が現れると説明している。

3.2.2 非疑問文との境界

以上のように、古代語の疑問文とム系述語の密接な関係が注目される一方で、係助詞

¹⁰ このような立場から、小川 1987 は前述の終止形終止の疑問詞疑問文について、「露や何なり」タイプは疑問文だが文末が確定していないため連体形にならないと説く。

「ヤ」「カ」とム系述語の連携する文のすべてを疑問文と了解すべきではないという立場もある。たとえば、木下 1978 が上代に 100 例余り見られると指摘する、「ヤ…ムを含む一人称主格の疑問文」（「み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も吾が一人寝む」（万葉集 74）など）のような文である。木下はこのような文について、形式的には疑問文でありながら疑問の意は認められず、「腑甲斐ない自分の「現在」のあり方をじれったく思いつつそれをどうすることもできない」ことを表すと特徴づける。

吉田 1994 は木下の指摘する「かくや嘆かむ」タイプや、後述する「しづ心なく花の散るらむ」タイプなど疑問文風に訳されがちなム系述語文について、その内容の傾向を現状拒否性と名づけ、現状を拒否する表現者の抵抗感を伝えるための手段として疑問表現の構造が利用されているのだと論じている。

「かくや嘆かむ」タイプ以上に多くの研究がなされてきたのが、外形的には疑問の要素がないにもかかわらず「なぜ～のだろう」と訳したくなる「しづ心なく花の散るらむ」タイプ（「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」古今 2・84）である。鈴木 1989 によれば、このタイプに関する研究は①詠嘆説（宣長の「かなの意にかよふらむ」の影響）②推量説（三矢重松・松尾捨治郎）③疑問詞省略説④喚体性詠嘆表現の疑念含意説（山口堯二）にまとめられるという。しかし、①④は詠嘆表現における「らむ」の意味機能の説明が困難であり、②では「しづ心なく」を推量の対象とすることが不自然であり、③では疑問詞のように重要な役割を果たすものがなぜ省略できるのか疑問が残るというように、どの説にも何らかの問題がある。鈴木自身はこのタイプを喚体性の疑問文と規定し、上接句との逆接関係から「なぜ」の存在が示唆されると説明している。

なお、疑問文であるか否かを問題にした研究ではないが、このタイプの表現におけるム系助動詞のはたらきに着目した研究に、栗田 2011 がある。栗田は「しづ心なく花のちるらむ」タイプの文に加え、「ムヨ・ラムヨ・ケムヨ」の形で終わる感動喚体の文を考察対象とする。これらの文が表すのは言語主体の外部から与えられた未来事態か、言語主体にとって本来あるはずの姿と齟齬する既実現事態のどちらかであると整理した上で、ム系助動詞はこれらの文において事態が現実世界に存在することを思い描く作用である「設想」を担うと述べている。

3.3 係助詞「ヤ」「カ」

3.3.1 「ヤ」と「カ」の比較

係助詞「ヤ」「カ」がどういうわけで疑問の係助詞と言えるかについては、「ヤ」の係

り結びによって構成される疑問文と「カ」の係り結びによって構成される疑問文の比較を通して議論されることが多い。近藤 2000 によれば、そのもっとも古いものは本居宣長『詞の玉緒』および富士谷成章『あゆひ抄』であるという。特に成章は「カ」を「思ふカ」、「ヤ」を「問ふカ」と対応させて、両者の違いを指摘している。

この考え方は長く受け継がれ、たとえば佐伯 1938 は「ヤ」と「カ」の違いとして次の 3 点を指摘する。

- ①「ヤ」が問いを表し、「カ」が疑いを表す。特に文末に置かれる場合にはこの区別が明確になる。
- ②文末に置かれるとき、「ヤ」は終止形を承け、「カ」は連体形や体言を承ける。
- ③疑問語の下には「カ」のみが用いられる（「何所爾可船泊すらむ」万葉集 58）のに対し、「ヤ」は疑問語の上にくる（「見む人やたれ」万葉集 1968）。

佐伯は特に③を根拠に、「ヤ」の本義は指示の気持ちであって、疑問は転用の結果であると主張する。

「ヤ」「カ」の本義についてはその後も様々な考えが提出されてきた。阪倉 1957 は、「ヤ」は「見む人やたれ」のように疑問が提出されている対象（「見む人」）を提示・強調する助詞であり、文末に用いられた場合に一文の叙述をそのまま聞き手にもちかけ、肯定否定の決定を迫る問いかけの意味を持つことになる、佐伯同様、「ヤ」は本来的に疑問の助詞ではないと考える。これに対して、「カ」は疑問点となっている事実そのものを直接に指示する助詞である、すなわち本来的に疑問の助詞であるとする。野村 2001a も、対内容性の強い「カ」と対聞き手的性格が強い「ヤ」とは語性が異なると指摘している。

本義に関する議論が展開されるのと並行して、それを支える事実の指摘も行われた。たとえば、田中 1985 は、ム述語文における「ヤ」「カ」の上接語句を詳細に調査したものである。それによれば、主・対・与格の語句を承ける場合や時に関する語句を承ける場合には、「ヤ」の上接語句は事態性を担うものや具体的な状態を示すコト的なものであるのに対し、「カ」の上接語句は事態を構成する一項目であるという。また、「～て」「～つつ」「～ず」など後続事態のありかたを規定する副詞句や、副助詞を有する語句、「なほ」「さらに」「つひに」など叙法の副詞を承けるのは「ヤ」のみであるが、これはそのような限定のもとに事態が成り立つかどうかを問題にするタイプの疑問は「ヤ」にしか担えないためだと説明している。

上代語に見られる両者の違いは中古語にも受け継がれるものの、沢瀉 1941 が示すように、中古語では「カ」が次第に「ヤ」にとって代われ、文中に「カ」が現れるのは「Wh カーム」の文型においてのみとなる。野村 2001a はこの転換について、万葉集で既に「カ」の係りより「ヤ」の係りの例が多く見られる意味領域が問い・反語・不望予

想（木下 1978 の指摘する「かくや嘆かむ」タイプ）の 3 領域であることを根拠に、ヤの対聞き手性、問いかけ性の強さが求められて「カ」から「ヤ」への転換が起こったのではないかと述べている。

3.3.2 係助詞の下位分類

上のように「ヤ」と「カ」を突き合わせて両者の違いあぶり出していく議論が多い中、尾上 2002 や吉田 2009 のように係助詞の下位分類の中に「ヤ」と「カ」の違いを解消しようとする議論もある。

尾上 2002 は係助詞を第一種（「ハ」「モ」「ヤ」「コソ」）と第二種（「ゾ」「カ」）に分け、前者は係助詞の「前後両項の結合の承認の仕方をめぐって意味を与えるもの」であるのに対して、後者は「上接項目になんらかの意味ないし気持ちを加えるもの」であるとする。したがって、疑問は主語と述語の承認留保であるとする尾上にあつては、本質的に疑問の係助詞と言えるのは「ヤ」のみであり、上接項目に不確定感を伴った嘆きを加える「カ」（「ゾ」は確言系の嘆きを加える）の係り結びによる文が常に疑問文であるとは限らないという。

また、文末用言の形態に影響を及ぼすという結果的な共通性をもって係助詞の本質的な同質性が保証されるわけではないと考える吉田 2009 も、係助詞を、他の事態への関心を強く持つ「ハ」「モ」「コソ」（連体形で結ばない点でも共通する）と当該文の内容事態そのものを対象とする「ゾ」「カ」、そして対人格的な関係構成機能が際立つ「ナム」

「ヤ」の 3 種に分ける。それぞれ、他の品詞でいえば、「ハ」「モ」「コソ」は「ダニ」「スラ」「サエ」などの副助詞に近く、終止用法を持つ「ゾ」「カ」は終助詞に近く、話し手の思惑の直接的な表出である「ナム」「ヤ」は間投助詞的であるという。この考えは野村 2001a が指摘する「ヤ」「カ」の語性とも整合性が高い。

ただし、尾上 2002 にしろ吉田 2009 にしろ、この整理ですべての疑問文の実例を説明できるわけではない。上代から中古へと大きく変わっていく係り結びの事実を扱う際の背景的な理念と見るべきであろう。

3.3.3 疑問用法とそれ以外の用法の関係

上記 2 つのタイプの議論がそれぞれの方法で「ヤ」と「カ」の違いをあぶり出すことを通して、係助詞「ヤ」「カ」と疑問文の関係を論じていたのとは異なり、助詞が持つ用法全体に目を配り、その中で疑問用法の位置づけを示すことによって、係助詞と疑問文の関係を説明しようとする研究もある。その代表的なものが各時代の「カ」の用法を論じ

る近藤要司の一連の研究である（近藤 1990・近藤 1998・近藤 1999・近藤 2002）。

まず近藤 1990 では、上代の「か（も）」について、文末カの場合には上接の述語の種類によって①裸の動詞あるいは確定系助動詞につくと詠嘆用法②推量系助動詞につくと疑問用法③打消の「ず（ぬ）」につくと希求あるいは詠嘆の用法になると整理する。一方、文中カの場合には、不定語につけば説明要求用法になるわけだが、不定語以外の語につく場合、結びの述語が推量系か非推量系かによって用法が異なる。非推量系の述語で結ぶ場合、カがつく語は疑問の対象であるのに対し、推量系の述語で結ぶ場合、文は疑問文というよりも疑問推量文であり、カがつく語は不安危惧の情意の集中心点としての意味合いが前面化するという。

次に中古の「カ」については、近藤 1998 で「活用語＋文末カ」の主たる用法が上代の感動文から疑問文へと変化していることを指摘した上で、疑問文の中でも事態の成立そのものを問うタイプ（これは文末ヤの疑問文が担う）ではなく、対象事態へ適用する説明解釈の適否を問うタイプに偏ると述べている（その上で、近藤 2002 では『今昔物語集』になると限定的に事態成立型の文末カ疑問文が現れることが明らかにされる）。不定語に下接する「カ」については、近藤 1999 で不定語に「カ」が下接する疑問文と下接しない疑問文とを比較した結果、「カ」は不明確な項目を明確化する志向の表示であることが分かったと述べている。

3.4 「ノ」

3.4.1 「ノ」が参加する疑問文の表現上の性格

現代語の「ノ」が参加する疑問文の研究は、ノダ文研究の一環として、疑問文版である「ノカ疑問文」においても平叙ノダ文と同じ表現上の性格が見られるかを検証する形で行われてきた。田野村 1990 は、ノカ疑問文は「のダ」（「のだ」「のか」などの総体）の意味特性を反映して、背後の事情や実情を尋ねる既定性を感じられるとともに、相手に尋ねなくては答えの知りようがないようなことがらを尋ねているという印象（披瀝性の含み）や、他の可能性ではなくそれであるかと尋ねているという印象（特立性の含み）といった意味特性を持つと述べる。また、野田 1997 は平叙文に見られる 2 種の「の（だ）」であるスコープの「の（だ）」とムードの「の（だ）」のどちらも質問文に見られるが、特にムードの「の（だ）」の現れ方は平叙文の場合と並行的に考えることができると述べている。

一方、吉田 1994 のように、自身の行った平叙ノダ文研究（吉田 1988）で論じた平叙ノダ文の構造—叙述内容をいったん体言化しておくという構文上の手続きがなされる—

を援用するものの、表現効果（説明、決意、命令など）は平叙文に特有のものとして疑問文研究に取り入れないという姿勢もある。吉田 1994 は説明要求の疑問文には「ノ」が参加するノデスカ型を用いるのが常態であるとした上で、質問という言葉行為の行われる場面を 4 種に分類し、その中でも質問のエネルギーが帯電している場面では「ノ」の参加しないマスカ型による説明要求の方が自然になると述べており、平叙文と疑問文（質問文）の違いを意識した議論を展開している。

これに対して、吉田 1988 が指摘する平叙ノダ文の表現効果との対応から「のですか」質問文の表現性を説明したのが岡部 1995 である。岡部 1995 によれば、話し手の解釈案に対する当否判定や内容完成を要求する「のですか」質問文における体言化の機能は「解釈」の平叙ノダ文における体言化の機能に、情報開示を要求する「のですか」質問文における体言化の機能は「告白」の平叙ノダ文における体言化の機能に、なすべき行為の当否判定あるいは内容完成を要求する「のですか」質問文における体言化の機能は「決意」の平叙ノダ文における体言化の機能に、それぞれ対応するという。

3.4.2 「ノ」のはたらき

平叙ノダ文の構造あるいは表現効果とのつながりを何らかの点で意識して「ノ」が参加する疑問文の用いられ方を記述する研究とは一線を画すのが、大鹿 1990 や金水敏による研究（金水 2011、同 2012a、同 2012b、同 2012c）である。

これらの研究では、平叙ノダ文の構造や表現効果には触れず、「ノ」のある疑問文と「ノ」のない疑問文の違いを観察することによって、疑問文における「ノ」のはたらきを分析する。たとえば、大鹿 1990 は「次郎が礼を言ったか」に比べて「次郎が礼を言ったのか」の方が安定的に疑問文として解釈できることを指摘し、これは「ノ」によって話し手の想定する事態がひとまとめにされたことにより、聞き手によって知覚される事態との関係を問うという疑問文の構造がイメージされやすいためだと論じる。

一方、金水は通史的に焦点構文を眺める立場（金水 2011）から、近現代語における焦点構文として「ノ」が参加する疑問文に着目する。このため、たとえば「ノ」が参加する疑問文においては「一体」という副詞の共起率が高まる（金水 2012c）という、ノダ文研究では「のダ」の披歴性との関連で説明されるであろう事実についても焦点構文であることと関連づけて説明している。

3.5 「力」

3.5.1 質問文における「力」の不自然さ

「カ」は疑問の助詞と呼ばれるが、必ずしも疑問文にとって必要なわけではなく、むしろ実際の発話では「カ」のない疑問文の方が自然なことが多いという事実は、早い時期から佐久間 1940 などで指摘されていることである。佐久間 1940 は、このような「カ」の不自然さについて、イントネーションで区別できるのにわざわざ「発問標示」の成分である「カ」を用いると厳しく解答を要求するように感じられるためと説明する。また、疑問詞疑問文の場合には「だれか?」「なにか?」と言わず、「君は一体だれだ?」「手にもってるのはなんだ?」とするのが通例であることも指摘している。

益岡・田窪 1992 は、さらに詳しく、普通体の疑問文を質問に用いる場合には「か」があってはいけないという事実―「*次は何を見るか。」「次は何を見ますか。」―を指摘している。金水 2012b はこれを、「普通体+か」では話し手の分からない気持ちを他人への配慮なしに表現することになるためと説明している。

3.5.2 「カ」は疑問の助詞か

現代日本語の疑問文に関わる助詞や文法形式は「カ」に限らない。加えて「カ」自体が上記のように質問文で使いにくいという一面を持つ。にもかかわらず、「カ」は「疑問の助詞」であると言われ続けている。どのような意味で「カ」を疑問の助詞と認めるかは、「カ」の本質的な性格をどのように捉え、疑問用法以外の「カ」とのつながりをどう理解するかによって異なる。たとえば、陳述論の代表的論者である渡辺実は、渡辺 1971 の中で、「カ」は「判定することへの疑念・自分の責任では判定がつきかねることを内面的意義として担い、その意義の故に最もしばしば疑問という陳述の職能を託される」と説明する。自らは判定の責を負わず、相手の判定に依存するところから疑問の陳述となるという論理である。

また、モダリティ論の代表的論者の一人である益岡隆志は、益岡 2007 の中で、「カ」は「不定性標識」であり、不定真偽判断の表現のひとつに「質問・自問」があると考える。不定真偽判断の表現にはその他にも、認識系に「不確かさ」「納得・了解」「発見」があり、感情系に「驚き・感嘆・詠嘆」「不満」「反語・擬似反語」があるという。

他にも、言語学の立場から「カ」の多義性を論じたものに、土屋ほか 1990a、1990b がある。向こうからやってくる知人について自分の隣にいる人にクイズ的に問う場合、「あの人は誰だ?」と言うことはできても「あの人は誰か?」と言えないのは話し手本人には誰であるか分かっているためであるということを根拠に、「カ」は「話し手は知らない」ことを表すものであると論じる。そして、そのことから疑問以外の選択（「恭弘か恵理かがすわっている」）・存在（「恭弘か誰かがすわっている」）などの用法も説明するのである。

4 文型の研究

本節で取り上げるのは、前節のようにひとつの構成要素に着目する研究ではなく、構成要素の参加のあり方（参加の有無、単独で参加するか連携して参加するか）すなわち疑問文の文型に様々なものがあることを前提に、どの文型の疑問文をどのような疑問表現に用いるかを整理・記述するタイプの研究である。記述の視点には、ある時代あるいはある作品の内部で複数の文型がどのように使い分けられているかを問題にする共時的研究と、文型の使われ方が時代によってどのように変遷していくかを問題にする通時的研究とがある。

以下では、まず通時的研究にどのようなものがあるかを見た後、各時代の共時的研究でどのような文型が研究の対象とされてきたかを確認する。

4.1 通時的研究

時代をまたぐ大局的な観点から疑問文型の変遷を追う研究の嚆矢は阪倉 1960 である。阪倉は沢瀉 1941・沢田 1960 による「ヤ」「カ」の研究や外山 1957 による「ゾ」の研究などを踏まえ、上代から近世にかけて文中係助詞が消え、疑問詞や「カ」など本来は疑いのしるしであったものが問いのしるしへと変質する疑問文型の変遷を文型の単純化としてまとめる。同時に、問いの表現形式が確立する一方で、疑いを表す形式「かしらぬ」「ぢやしらぬ」「だらうか」などの複雑化が見られる点も指摘している。阪倉はこれらの流れを、表現形式の論理化という日本語文法史の大きな方向性に合致する現象と見ている。

一方、最近の研究を見れば、衣畑 2014a および衣畑 2014b は『万葉集』『源氏物語』『覚一本平家物語』『史記抄』『虎明本狂言集』の疑問表現を追い、助詞「カ」「ヤ」の有無と位置（文中・文末）によって整理した結果、疑問文の文型は質問と自問を区別するものではなく、疑問詞疑問（Wh 疑問文）と肯定疑問（Yes/No 疑問文）の区別を目指して変化が進んできたように見えると論じている。さらに衣畑は資料に現れない「前上代」の様相を推定することにより、疑問文型の変遷を係り結びによって複雑化した文型分布の「先祖帰れ」と見る可能性にも言及している。

このように、助詞「ヤ」「カ」の振る舞いの変化をどのように解釈するかが研究の中心を占める点で両者は共通している。金水 2015 はこれを、日本語疑問文の歴史が「係り結びという特異な構文を軸として変遷してきた」ためであると分析している。なお、金水 2015 によれば、中世末期以降は衣畑 2014a、2014b の論じる疑問詞疑問文と肯定疑問文の区別よりもむしろ、直接疑問文と間接疑問文の区別の方が露わになっていくという。

4.2 上代・中古

上代は文献から疑問文型の使用実態を探ることのできる最も古い時代である。しかしながら、その文献は記紀歌謡および『万葉集』すなわち韻文に偏る。このため、会話上の細かいニュアンスと疑問文型の対応など、現代語的な意味での文型の使い分けを論じることはいかなる。

このような制限の中で、たとえば阪倉 1958 は説明要求の疑問表現と判定要求の疑問表現の間に見られる表記の違いに着目する。すなわち、『古事記』において判定要求の疑問表現は必ず文末に「哉・耶・乎」の助辞が表記されるのに対して、説明要求の疑問表現にこれらの助辞が添えられることはない。また、『万葉集』においても、判定要求の疑問表現には「哉・歟・耶」あるいは「疑」の字で「カ」「ヤ」を表記することがあるのに対して、説明要求の疑問表現にはこれらの表記がなされることはないという。阪倉はこれらの表記の違いから、和歌が個人の世界をうたいあげる文芸としての性格を確立する前の時代（＝上代）には、助辞によって「問い」を明示する判定要求は問いの表現、疑問詞の存在のみで疑問文を成立させようとする説明要求は疑いの表現という質の違いが両者の間にあったのではないかと見る。

次に上代から中古への変化を記述するのが、三宅 1985 である。三宅は記紀歌謡・風土記歌謡・『万葉集』の上代和歌と八代集の中古和歌に見られる Wh 疑問文を比較し、「Wh ソー連体形」のように中古では消滅する上代特有の文型がある一方、「Wh—連体形」

「Wh—終止形」のように中古で一般化する文型、「一ハ／ヤ Wh ゾ」「一ハ／モ／ヤ Wh ナリ」のように中古になってから現れる文型もあると整理する。これについて、三宅は不定語を含む句的体言すなわち広い意味での喚体的表現であった Wh 疑問文から、不定語を疑問副詞的存在にし、述語に連体形を要求する述体的表現への変化と見る。

そして仮名文学作品（散文）を主な調査資料とする中古になると一転して、多様な文型を備える述体的な疑問表現がどのように使い分けられるかが文型研究の中心となる。代表的なのは岡崎 1996 である。岡崎はまず助詞「ヤ」「カ」の位置と文末の述語に推量の形式を持つか否かの観点から疑問文型を「一ヤ一推」「何一カ一推」「一ヤ一」「何一カ一」「一ヤ」「一カ」の 6 文型に分ける。そして、これらが地の文・心内文（疑の文と心の文から成る）・会話文（問の文と詞の文から成る）においてどのように現れるかを分析した結果、文末に推量の形式を持つ 2 文型が疑を表す文型であるのに対して、他の 4 文型は問を表す文型であると結論づけた。

また、中古の間の変化として磯部 2000 および磯部 2004 は『源氏物語』『今昔物語集』『覚一本平家物語』を対象に、中古から中世にかけて文型の用いられ方が変わっていく様子を記述する。その中でも特に要説明疑問表現（Wh 疑問文）における「ニカ」や要判

定疑問表現（Yes/No 疑問文）における「ニヤ」に着目し、これらが中古を通して文中要素としてより文末要素として用いられるようになること、そして中世においてもなお用いられるか否かは文体が中古和文的であるか否かに左右されることを明らかにしている。

4.3 中世

「ヤ」「カ」による係り結びを駆使した疑問文型の多様化とその使い分けが体系的に行われていた中古を経て、中世以降を対象とする文型研究で考察の中心となるのは、新しい文型がどのように既存の文型にとって代わり、疑問表現の全体像を変えていくのかという点である。

これについて、清水 1994 は、『今昔物語集』『保元物語』『平治物語』『天草版平家物語』の疑問文型を記述し、不定方式（Wh 疑問文）における「一ゾ」文型、および特定方式（Yes/No 疑問文）における「一カ」文型のような文末終助詞による文型の出現と発展を指摘している。この傾向は、覚一本平家物語と天草版平家物語を比較する紙谷 2000 も同様に指摘するところであるが、紙谷はさらに「一カ」が要説明（Wh 疑問文）においても一般化していると述べている。

このように係助詞から終助詞へと疑問文型の中心的構成要素が移行することと関係のある現象として、主格表示の助詞の明示についても言及がなされてきた。たとえば、清水 1995 は「一ゾ」「一カ」といった終助詞型の疑問文型が優勢になるのに従い、「一ハーカ」「一ガーカ」がそれぞれ問いと疑いに機能を分担するよう見えると述べている。また、山田 2005 は、『万葉集』から『虎明本狂言』まで各時代の疑問表現を見渡し、「一ガーカ」形式や「不定成分＋ガーゾ」形式が文中「ヤ」「カ」を凌駕していく様子を記述する。そしてこの変化が森重 1959 のいう係結的断続関係から論理的格関係への変化を体現するものであると述べている。

また、主格以外の格助詞の表示も含めてこの現象を捉えた研究として、徳永 2010 がある。徳永は天草版平家物語とその原テキストの対応のあり方を、「ヤ」の上接項目別に整理することにより、存在詞疑問文（事態生起疑問文・存在疑問文）では「一ヤー連体形」から終助詞カへの交替が単純には行われなかったことを示唆している。そして、この点に着目して、徳永 2009 では存在疑問文のみを取り上げ、終助詞型への交替が容易でない要因に存在疑問文特有の「有情＋ハーカ」と「非情＋[■・ノ]一カ」という文型の使い分けが存在していたことがあると述べている。

この他に、中世の疑問文型研究として、間接疑問文の成立に関するものがある。高宮 2004、2005 によれば、間接疑問文は選択疑問文タイプのものが室町時代前期から見られ

始めるのに対し、疑問詞疑問文タイプや「～かどうか」タイプのものは遅れて出現するという。また、その前後に「カ」に選言や不定の用法が生じたことについても衣畑・岩田 2010 に綿密な分析がある。間接疑問文の成立と発展、およびその周辺にある事実についてはこの他にも近年、金水 2014 や志波 2015、衣畑 2016 など論じられている。

4.4 近世

近世の文型研究についてはまず、前代からの変化として中世において Wh 疑問文の有力な文型であった「Whーゾ」文型から「ゾ」が脱落する現象を扱う研究が挙げられる。早くにこの現象を指摘した外山 1957 は、質問表現の「ゾ」を第一類（質問のもちかけの働きのみを持つもの。「して清盛の嫡子をば何と言うたぞ」（天草・平家巻一））と第二類（指定判断と質問のもちかけの働きを共に備えるもの。「いつの間に变りはてた御心ぞ」（天草・平家巻三））に分け、後者から先に消滅すると述べている。一方、矢島 1997 は体言述語か用言述語かということが「ゾ」の脱落に与える影響は小さいとしてこれを退け、むしろ場面や状況への依存の高い箇所や、敬意表現において「ゾ」は脱落しやすいと分析している。また、近年の研究として、竹村 2016 は自問や反語など問いかけ性の低い場合にゾが脱落しやすいと指摘した上で、ゾが脱落する文と現代語で「ノダ」を必要としない疑問詞疑問文には共通点があると述べている。

このように前代から見られる文型が一層現代語の文型に近づいていく様子とともに、中世末期・近世に至って見られ始める複雑な疑問文型も近世の疑問文型研究の対象となる。その代表は否定疑問文であり、森 2014 や矢島 2016 などの研究がある。このうち、矢島 2016 は近世上方語と江戸語の否定疑問文の用法差を調査し、[共有指向性／説明・打診型]の上方語においては認識評価を共有する～デハナイカや～ヌカ・ナイカの「提案・依頼・命令」用法などが発達したのに対し、[一方向性／主張・提示型]の江戸語においては既定事実の確認をする～デハナイカなどが発達したと、地域による表現指向の違いと絡めて文型の使われ方を論じる。

この他にも、江戸語で発達した疑問文型に、疑いの専用形式である「カナ」「カシラ」などがある。これについて、たとえば堀崎 1995 は、江戸語資料には「ーヤラ」「ーシラン(ヌ)」「ーヨウダ／ソウダ」といった疑い表現専用の形式が存在すると指摘している。続けて、小野 1998 では、問いの表現と疑いの表現を対照し、疑問詞を用いる形式（Wh 疑問文）においては疑いの表現のほとんどに推量の助動詞が含まれるのに対して、問いの表現にはこれが含まれないこと、また、疑問詞のない形式（Yes/No 疑問文）においては「～カシラン」や「ハテ」が疑いの表現にしか見られないことを明らかにした。

一方、現代語で疑い専用の形式として多用される「カナ」については、中野 1993 が江

戸語においては「カ」がない疑問文にも「ナ」「ネ」「ノ」が付加すること、自問系の疑問文にも他問系の疑問文にも「ナ」「ネ」「ノ」が付加することを指摘し、疑い専用の形式としてはいまだ成立していないことを示唆する。

4.5 近代・現代

近世から近代にかけての疑問文型の変遷を扱う研究としては田中 1956 が挙げられる。終助詞「カネ」・「カイ」・「イ」・「ト」が現れた文化・文政期および「カシラ」・「ノ」・「ノサ」などが現れる明治初期から中期にかけての二つの変動期を中心に文型の変遷を描くものである。変化の動機について田中は、京阪語から江戸語への移行、および「カ」という助詞が持つ詰問的な響きを回避するための各種終助詞の発達や上昇調イントネーションへの依存を挙げている。

現代日本語の疑問文型を整理した研究として第一に挙げるべきは、2.1 でも取り上げた国立国語研究所 1960 であろう。2.1 で、宮地が疑いの表現と問いの表現を切り離し、前者を判断未定の表現として判叙表現の一角に置いたことに言及した。宮地は、このうち文末に「カ」を置くもの（「なんだい相撲かと思ったら相場か」）を判断未確定の表現、「カナ」「カシラ」「ジャナイカ」を文末に置くものを判断への疑念の表現として区別している。一方、判定要求の表現の文型としては「～カ」「～ノ」「～ンジャナイ {■／カ／ノ}？」および文末上昇調を挙げている。これに対して、説明要求の表現については、不定詞の種類を分類するのみで文型は示されない。

同時期には、林 1960 も疑問文型を含め日本語の文型を独自に整理した。文型を「語の並びの社会的慣習」と位置づける林は、文を言い終わる時の文型を「結び文型」と呼び、この中に 1) 描叙段階、2) 判断段階、3) 表出段階、4) 伝達段階があるとした。疑問文型はこのうち 2) 判断段階で疑問判断の表現型として「か、のか」「かな、のかな」「かしら、のかしら」「だろうか」「ないか」「のではないか」が、4) 伝達段階で質問の表現型として「か」「のか」「ね」「のね」「の」が挙がる。

話し手の表現意図や表現の姿勢を体系的に捉えようとする国立国語研究所 1960 や林 1960 とは異なる目的から現代語の疑問文型をまとめたものに、中島 1999、2002 もある。話し手の属性（性別・年齢）や話し手と相手の関係性に着目し、疑問表現の使用実態をまとめたものである。特に話し手の性別による使用実態の違いを探ることを主目的とするものであるが、女性が使うとされる「よね↑」「(な) の↑」「のね↑」などを実際には男性も使用しているなど、男性使用の文型／女性使用の文型という枠組み自体が成立しない可能性を指摘している。

5 まとめ

以上、原理的研究・構成要素研究・文型研究の3タイプに分けて疑問文・疑問表現の研究史を確認した。一口に疑問文・疑問表現の研究といっても、論者の抱える問題意識も説明される内容も様々である。

原理的研究は文法あるいは文に対する各論者の考えの中に疑問文という文の種類あるいは疑問表現という表現の種類を位置づけようとするものである。本稿ではそれぞれの考え方で疑問文を説明しようとすれば何が見えて何を見落とすことになるのかを確認し、「問い」概念の精密化をはじめとして今後取り組むべき課題を3点挙げた。

構成要素研究は、疑問文とその構成要素の関係に主眼を置く場合もあれば、各文法形式の用法や性質を論じる研究の中で疑問文における当該文法形式のはたらしに言及する場合もある。それらを通して、問題とする文法形式の疑問文における振る舞いについては多くの知見が蓄積されてきているが、今後はそれらの事実を手がかりに疑問文という文の種類や性質を明らかにする方向に研究が進展することが望まれる。

文型研究は扱う時代によって文型整理のポイントが異なり、特に係り結びを軸に文型が広がる中古以前と現代語の疑問文型につながる新文型が次々に成立する中世末期以降とに大きく分かれる。複数の時代にまたがって変化の方向性を論じる研究も現代語までを射程に入れたものではなく、各時代に形成された文型がどのようにそれぞれの居場所を得て現在の複雑な文型使い分けに至ったかを論じる総合的な研究が求められる。

参考文献

安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版

磯部佳宏 (2000) 「古代日本語の疑問表現 (下) 一要判定疑問表現の場合」 『山口大学文学会誌』 50, pp.152-139

磯部佳宏 (2004) 「古代日本語の疑問表現 (上) 一要説明疑問表現の場合」 『山口大学文学会誌』 54, pp.49-62

井上優 (1991) 「受信情報の疑問文」 『日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」、津田日本語教育センター』, pp.35-41

大鹿薫久 (1990) 「疑問文の解釈」 『語文』 55, pp.17-26

大鹿薫久 (1991) 「萬葉集における不定語と不定の疑問」 『国語学』 165, pp.53-66

大野晋・大久保正編集校訂 (1970) 『本居宣長全集 5』 筑摩書房

岡崎正継 (1996) 『国語助詞論攷』 おうふう

岡部嘉幸 (1995) 「『のですか』 質問文の表現性―体言化の機能という観点からの分類の試み―」 『築島裕博士古稀記念国語学論集』, pp.1021-1040

小川栄一 (1987) 「疑問文が連体形に終止することの意義」 『福井大学教育学部紀要第 I 部人文科学』

- (国語学・国文学・中国学編)』36, pp.1-15
- 小野葉子(1998)『『春色梅児誉美』の疑問表現—『問いかけ』と『疑い』の形式の交渉—』『青山語文』28, pp.138-150
- 尾上圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」『講座日本語学 2』明治書院, pp.1-19
- 尾上圭介(1990)「文法論—陳述論の誕生と終焉—」『国語と国文学』67-5, pp.1-16
- 尾上圭介(2002)「係助詞の二種」『国語と国文学』79-8, pp.62-76
- 尾上圭介(2012)「不変化助動詞とは何か—叙法論と主観表現要素論の分岐点—」『国語と国文学』89-3, pp.3-18
- 沢瀉久孝(1941)『『か』より『や』への推移』『万葉集の作品と時代』岩波書店, pp.115-183
- 紙谷栄治(2000)「中世における疑問表現について」『国文学(関西大学)』80, pp.72-82
- 川端善明(1979)『活用の研究Ⅱ』大修館書店
- 川端善明(1997)『活用の研究Ⅱ増補再版』清文堂
- 衣畑智秀・岩田美穂(2010)「名詞句位置の力の歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6-4, pp.1-15
- 衣畑智秀(2014a)「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」『日本語文法史研究 2』ひつじ書房, pp.61-80
- 衣畑智秀(2014b)「上代から中世の疑問文の様相—データ解釈を中心に—」『福岡大学人文論叢』46-1, pp.57-95
- 衣畑智秀(2016)「係り結びと不定構文—宮古語を中心に—」『日本語の研究』12-1, pp.1-17
- 木下正俊(1978)『『斯くや嘆かむ』という語法』『萬葉集研究』7, pp.215-249
- 金水敏(2011)「第3章 統語論」『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp.77-166
- 金水敏(2012a)「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」『近代語研究』16, pp.351-367
- 金水敏(2012b)「疑問文のスコープと助詞『か』『の』」『国語と国文学』89-11, pp.76-89
- 金水敏(2012c)「日本語の疑問詞疑問文と『の』の有無」『語文』99, pp.57-75
- 金水敏(2014)「疑問文の意味と構造—選言形式との関係から間接疑問文の意味と構造を考える—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会資料
- 金水敏(2015)「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』5-3, pp.108-121
- 金田一春彦(1953a)「不変化助動詞の本質(上)」『国語国文』22-2, pp.1-17
- 金田一春彦(1953b)「不変化助動詞の本質(下)」『国語国文』22-3, pp.15-35
- 栗田岳(2011)『『しづ心なく花のちるらむ』—ム系助動詞と『設想』—』『日本語の研究』7-1, pp.16-31
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』
- 国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2)—独話資料による研究—』
- 此島正年(1972)「露や何なり」『国学院雑誌』73-11, pp.46-56
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

- 近藤要司 (1990) 「上代における助詞カ (モ) について一文カ (モ) の指示しているものはなにか」『四国女子大学紀要』10-1, pp.123-137
- 近藤要司 (1998) 「『源氏物語』の助詞カの文末用法について」『金蘭短期大学研究誌』29, pp.23-32
- 近藤要司 (1999) 「『源氏物語』の助詞カの不定語下接用法について」『親和国文』34, pp.99-126
- 近藤要司 (2002) 「『今昔物語集』の文末カの用法について」『親和国文』37, pp.1-19
- 佐伯梅友 (1938) 「萬葉集の助詞二種—『の』『が』及び『や』『か』について—」『万葉語研究』文学社, pp.1-61
- 阪倉篤義 (1956) 「石をたれ見き」『解釈と鑑賞』21-10, pp.133-136
- 阪倉篤義 (1957) 「反語について」『万葉』22, pp.1-12
- 阪倉篤義 (1958) 「上代の疑問表現から」『国語国文』27-11, pp.119-132
- 阪倉篤義 (1960) 「文法史について—疑問表現の変遷を一例として—」『国語と国文学』37-10, pp.75-88
- 阪倉篤義 (1975) 『文章と表現』角川書店
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』岩波書店
- 佐久間鼎 (1940) 「終止助詞『か』と発問の態度」『現代日本語法の研究』厚生閣, pp.75-95
- 沢田美代子 (1960) 「助詞カ・ヤの歴史的変遷」『大阪府立大学紀要 人文・社会科学』8, pp.209-217
- 清水登 (1994) 「疑問表現について—院政期から室町期まで—」『長野県短期大学紀要』49, pp.183-194
- 清水登 (1995) 「疑問表現について—院政期から室町期までの表現と主格助詞の用法をめぐって—」『長野県短期大学紀要』50, pp.283-298
- 志波彩子 (2015) 「日本語の間接疑問文の発達をめぐって—近代から現代へ—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会資料
- 鈴木義和 (1989) 「『しづ心なく花のちるらむ』型の文について」藤岡忠美編『古今和歌集連環』和泉書院, pp.363-380
- 高瀬正一 (1989) 「疑問詞による係り結びについて—『源氏物語』を資料として—」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』, pp.603-620
- 高橋麻美子 (1980) 「和歌に於ける『—や何なり』」『叙説』, pp.18-37
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ (ウ) による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『三重大学日本語学文学』15, pp.110-124
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.92-104
- 高山善行 (2002) 『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 高山善行 (2016) 「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』93-5, pp.29-41
- 竹村明日香 (2016) 「疑問詞疑問文と終助詞ゾ—中世以降のゾの脱落を中心に—」『国立国語研究所共

- 同研究日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（3）』, pp.16-32
- 多田知子（1989）『『の—らむ』文型について』藤岡忠美編『古今和歌集連環』和泉書院, pp.381-400
- 田中章夫（1956）「近代東京語質問表現における終止形式の考察—その通時的展開について—」『国語学』25, pp.31-42
- 田中敏生（1985）「万葉集におけるヤ・カの上接語句について—ム系述語文のばあいを中心に—」『国文論叢』12, pp.54-67
- 田野村忠温（1990）『現代日本語文法Ⅰ—「のだ」の意味と用法—』和泉書院
- 土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁（1990a）「日本語の意味論をもとめて 4 日本語に疑問文はない」『言語』19-4, pp.90-95
- 土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁（1990b）「日本語の意味論をもとめて 5 選択・疑問・詠嘆・存在の『か』」『言語』19-5, pp.90-97
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店
- 徳永辰通（2009）「存在疑問文の変遷—疑問形式と存在確認対象と助詞—」『解釈』55-11,12, pp.26-35
- 徳永辰通（2010）『「～ヤ—連体形」から終助詞カへの交替—天草版『平家物語』に見る交替の諸相—』『人文学部研究論集（中部大学）』23, pp.1-21
- 外山映次（1957）「質問表現における文末助詞ゾについて—近世初期京阪語を資料として—」『国語学』31, pp.37-46
- 中島悦子（1999）「第3章 疑問表現の諸相」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 中島悦子（2002）「第3章 職場の男性の疑問表現」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 中田祝夫・竹岡正夫（1960）『あゆひ抄新注』風間書房
- 中野伸彦（1993）「江戸語の疑問表現に関する一つの問題—終助詞『な』『ね』が下接する場合の自問系の疑問文の形式—」『近代語研究』9, pp.283-296
- 仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版, pp.1-56
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄（2016）『文と事態類型を中心に』くろしお出版
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 野村剛史（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9, pp.1-27
- 野村剛史（1997）「三代集ラムの構文法」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』, pp.191-210
- 野村剛史（2001a）「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1, pp.1-34
- 野村剛史（2001b）「か」山口明徳・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院, pp.115-117

- 野村剛史（2014）「ム」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店，pp.601-602
- 芳賀綏（1954）「“陳述”とは何もの？」『国語国文』23-4，pp.47-61
- 林四郎（1960）『基本文型の研究』明治図書出版
- 林淳子（2016）「言語的反応の観点による疑問文の分類」『日本語学論集』12，pp.401-376
- 船城俊太郎（1973）「疑問詞疑問文は連体形で終止する」『言語と文芸』76，pp.222-243
- 堀崎葉子（1995）「江戸語の疑問表現体系について—終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に—」『青山語文』25，pp.1-11
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 三宅知宏（2011）『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 三宅尚子（1985）「不定語を含む疑問表現の類型—上代・中古の和歌に於いて—」『国文学研究ノート』18，pp.1-25
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- 宮地裕（1951）「疑問表現をめぐって」『国語国文』20-7，pp.1-16
- 宮地裕（1954）「いわゆる『文の性質上の種類』の原理とその発展」『国語国文』23-11，pp.23-34
- 宮地裕（1958）「文と表現文」『国語国文』27-5，pp.1-14
- 宮地裕（1979）『新版文論』明治書院
- 森重敏（1959）『日本文法通論』風間書房
- 森山卓郎（1992）「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59，pp.35-44
- 森勇太（2014）「行為指示表現としての否定疑問形の歴史—上方・関西と江戸・東京の対照から—」『日本語文法史研究 2』ひつじ書房，pp.153-172
- 矢島正浩（1997）「疑問詞疑問文における終助詞ゾの脱落—近世前・中期の狂言台本を資料として—」『日本語の歴史地理構造』明治書院，pp.151-166
- 矢島正浩（2016）「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」『日本語史叙述の方法』ひつじ書房，pp.187-212
- 山内洋一郎（2003）『活用と活用形の通時の研究』清文堂
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
- 山田昌裕（2005）「疑問表現における主格表示『が』拡大の様相—係助詞『や』『か』との関わり—」『国語と国文学』82-11，pp.57-69
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
- 吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15，pp.46-55
- 吉田茂晃（1994）「現状拒否性擬似疑問文—『かうしもとり集めて肝を砕くこと多からむ』（『蜻蛉日記』中巻）—」『解釈』40-7，pp.24-31
- 吉田茂晃（1994）「疑問文の諸類型とその実現形式—ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって—」『島大国文』22，pp.1-13

吉田茂晃（2009）「係助詞の分類と文末活用形との呼応関係」『山邊道』52, pp.53-63

渡辺実（1953）「叙述と陳述—述語文節の構造—」『国語学』13,14, pp.20-34

渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房

（はやし　じゅんこ　大学院人文社会系研究科　博士課程三年）